



中国朝鮮族の都市移動の社会的構造：青島市の事例から（特集 国境を越える移動とエスニシティ）

佐々木, 衛

(Citation)

社会学雑誌, 22:58-74

(Issue Date)

2005-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011030>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011030>



中国朝鮮族の都市移動の社会的構造

——青島市の事例から——

佐々木 衛

神戸大学文学部

一 はじめに

一九九〇年代の中国は、産業化の急進とともに、急激な労働力の移動を引き起こしてきた。産業化にともなう移動は、どの地域でも経験することであるが、中国の場合、人民公社体制のもとに人々の移動が制限されていた事情もあって、移動が社会構造に与える衝撃は大きかった。しかも中国社会は、元来、度重なる飢饉や戦災による人の移動はもとより、近世では江南・東南地域の開発、近代になってから東北地域の開発、そして「華僑」に代表されるように、人の移動と切り離せない歴史的経験をもち、社会関係や地域構造のなかに移動を内在化させてきた。東南地域に典型的に見られる「宗族」集団の発展、社会関係における「関係」主義、さらに、「水滸伝」に象徴される江湖を渡世する人々の間の「兄弟的結盟」など、社会関係の構造と倫理に組み込まれているのである。近年の人々の移動は、こうした構造と倫理によって

新たなエネルギーを賦活され、移動を加速されているのではないかと推測することさえできる。

本論では、現代中国における人々の移動にみられるエネルギーを、社会的な構造と文化的な論理の中から論じることと目的がある。労働力の移動は産業化のもとに引き起こされるといふ近代化の趨勢命題の一つに他ならないが、人々のエネルギーを掘り起こし、現実の移動を加速するのは、彼らが生きる社会と文化の構造の内にある論理に他ならないと考えるからである。

また、本論が検証する事例は、青島市の中国朝鮮族を対象としたものである。中国社会をフィールドにその社会的・文化的特徴を記述するには、中国朝鮮族はふさわしくないかと思われるであろう。中国社会という表現の中に、「漢族」が暗黙の内に了解されるからである。しかし、中国朝鮮族こそ、中国における移動を顕著に体現しているのである。彼らの多くは、一九三〇年代に朝鮮半

島から移動しており、その後も移動を繰り返してきたが、現在、中国の全土にネットワークを広げている。さらに、韓国との国交が結ばれた後には、十数万人が韓国に移動したといわれる。朝鮮半島の北部に「故郷」を持ち、中国を「母国」とし、韓国を「同胞」とみなしている。たび重なる移動を経験した彼らは、移動によって生まれるチャンスを最大にし、そして移動から生じるリスクを最小にするための技法を、これら論じるように、社会的ネットワークとして開拓しているのである。移動がどのような社会的な脈絡で加速され、どのような文化的な脈絡でエネルギーが引き出されるかを検討するとき、彼らの中にもっとも恰好の事例を見ることができないのではないかと考える所以である。

さて、一般に移動が加速化される要因として、次のような条件を指摘することができよう。

第一に、故郷から外に出ること、すなわち職業的・地域的移動が生活チャンスを拡大し、成功の条件とみなされる社会的、文化的な構造が存在すること。

第二に、個人的な才覚と努力といった達成的な価値、偶然のチャンスに恵まれる運不運が基調となる「裸一貫からの成功者モデル」が強調される行動志向を持つこと。

第三に、移動先で受け入れる条件が整っていること、少なくとも就業と居住などの情報提供、当座の生活をも

保障するネットワークが存在すること。移動者の事例をみると、先に出て新生活を開いた親族や友人を介して仕事を紹介されるのが一般的で、親族や友人のネットワークはいざというときの生活保障の役割を果たす。未知の土地への移動の不安を解消し、移動を加速する媒体となっている。

以上の状況について、具体的な事例として検証した論考をすでに発表している¹⁾。本稿では、親族・親戚関係、同郷・同窓、同じ職場での縁故などさまざまな機会を通して、ネットワークが開拓される事例を考察し、移動者のネットワークが構成される条件や論理を検証する。

なお、青島市の韓国企業と中国朝鮮族に関する基礎的な数字は以下のものである。青島に在住する韓国人は五万人、韓国人の出資する企業は約五千社である。また、青島市に住む中国朝鮮族の人口は七〇八万人にもなるといわれている。彼らの多くは吉林省と黒竜江省の出身で、韓国企業が進出している李滄区と城陽区に集住する。青島市地域の中国朝鮮族の企業家はおよそ五〇〇人である。一九九〇年代の初期の朝鮮族人口は二〇〇人にも満たない数であったといわれている。その多くは軍隊勤務者と大学関係者ばかりで、企業家やサービス産業従事者はいなかった。一九九七〜九八年からの急激な増大が目ざれるところであるが、その増大傾向はこれからも続く

考えられている。

二 移動者のネットワーク

(1) 祖先を祭祀しない親族ネットワーク

移動ネットワークの研究では、華僑・華人に関する研究が豊かに蓄積されている。移住先での同胞・同郷集団の形成、祖先祭祀のための廟・土地・族譜の共有、政治勢力としての成長、そして社会的・経済的な相互扶助などのテーマに関して、東アジア地域はもとより世界中の地域でモノグラフ研究があげられている。こうした血縁的・同郷的な集団は、先にあげた移動を促す媒体として今日でも機能を再構成していることはいうまでもない。しかし、今日の急激で大量の移動は、祖先祭祀によって集団の正統性と人々の献身を引き出す宗族組織の活動を越えている。各地から集まる都市、あるいは国外での国際都市では、系譜を確認できない人々をも包括した緩やかなネットワークが改めて注目される場所である。

祖先を祭祀しない親族ネットワークは、日本の「親類づきあい」に見られるように、近親の範囲のなかに「つきあい」という定型化されない緩やかなネットワークとして存在している。しかしある条件を備えた場合、韓国や中国（大陸、台湾）の宗親会が示すように全国的、あるいは世界的な組織に発展することもある。韓国におけ

るモノグラフ研究が明らかにしたところでは、都市では同姓の人々の間で花樹会・宗親会が組織され、同郷者の「郷友会」や「親睦契」、あるいは同窓会などともに社会的絆を構成する契機となっている。社会的交歓を目的とした親睦団体であるが、野心的な成員にとつては中央の権益に結びつくための連鎖的な人脉を構築する場となると報告されている（伊藤、一九八七）。したがって、郷友会や同窓会が結社(association)的な性格をもつように、都市に移住した人々が参加する花樹会・宗親会は、祖先祭祀のための親族組織と大きく異なるところがある。親族組織においては系譜関係が強調され、男性が活動の中心になるのに対して、花樹会・宗親会は、女性も参加し、成員間の平等性、系譜関係の曖昧さという性格を強く持つという（岡田、二〇〇一）。つまり、花樹会・宗親会は祖先を祭祀する親族集団の形態をとりながら、社会的な親睦と支援、あるいは政治的な権益を獲得するためのネットワークとして、父系単系出自の原理から離れて個人を中心とした組織に組み替えられているところに特徴がある。

延辺朝鮮族自治州に住む朝鮮族は、一九三〇年代に朝鮮半島から移住した家族が多く、その後、農地と就業機会をもとめて移住を繰り返している。親族組織を発展させるための条件、すなわち、親族の特定地域への集住、

祖先を祭祀するための共有財産（土地・廟・族譜）、あるいは親族集団による農地や水利灌漑施設の共同管理など、親族が集団として社会的に凝集する条件は一般的に脆弱であった。また、住居の移動を繰り返した彼らは、祖先の祭祀を数世代にわたって継承することが困難であった。聴き取り調査によると、父母の墓への墓参は、死後三年間は命日に息子や娘がそろってするが、その後は、清明節と仲秋節にそれぞれ各自墓参するだけだという（佐々木・方、二〇〇一・一九七）。父母の祭祀も個人化され、親族を集合する結節点としての祖先祭祀という活動が弱いのが推測できる。

しかし、親族のつきあいが淡泊なのでは決してない。遠い祖先を祭祀しない分、それだけ近い親族、姻戚者同士のつきあいには濃密さを感じる。延辺地区の聴き取り調査では、近くに住む兄弟、息子たちとの往来は頻繁な様子を見ることが出来た。収集した事例では、父母との同居、もしくは扶養は、必ずしも長子に限定されていない。息子たちが成長すると、長子から順に村の外に出て行く傾向がうかがえた。しかし、彼らは実に頻繁に往来していた。他出した家族の子どもたちが、夏休みに老父母のもとに送られてきて、長期間滞在する姿をよく目にした。都会に出た家族は居住条件が悪い場合が多く、子どもが家庭で夏休みを過ごす条件が欠けることが多い。

このような家族にとって、老父母ばかりでなく、村に残る兄弟や姉妹の家族は、子どもの養育を託す大切な場となっている。また、都市で失業すると、一時の生活を頼らなければならぬのも、村に残る家族や親族である（佐々木、二〇〇三）。

いざと言う時の生活を支える村の家族との絆は、都市に出る人々にとって最低保障となるもので、常に更新し続けておかねばならない。祖先祭祀に見られる慣習化された行事が希薄な分だけ、さまざまな機会を捉えて互いに行き交いあっている。その機会の一つが以下に示す誕生日であろう。

朝鮮族社会の中では、誕生日の祝いはすこぶる日常的な部類に属す。家庭では子どもへの健やかな成長を祈って誕生日を祝う。成人すれば、友人達や同僚が互いに声をかけて祝う。老いると、子どもたちが集まり両親の誕生日を祝う姿はどこでも見られる。しかし特に注目されるのは、老いた親の誕生日の祝いである。延辺地区で見聞した事例では、親の誕生日（もしくは、都合のよい日）に、息子や娘の家族たちが一同にそろおう。食材などを持ち寄って、早朝から食事の準備に取りかかる。テーブルにさまざまな料理が並べられ、昼食が祝いの宴になる。老いた両親たちの兄弟姉妹が近くに住んでいると、彼らも互いに訪問して祝いの席につく。特に儀式らしいもの

のはなく、息子たちの中の年長者が乾杯の音頭をとり食事を始める。遠くに住む息子や娘たちは、両親の誕生日の会が開かれれば、当日にあわせてお金を送ってくる。

中国朝鮮族の間では、高祖にはじまる子孫「八寸」の範圍の親族が一堂に会して祭祀する習慣はない。祖先の位牌を祀る祭壇もない。祖先の祭祀が親族の絆を更新する機会となっていないのに対して、以上のスケッチに見られるように、父母の誕生日の祝いは、父母を中心にした近親の家族の絆を改めて確認する場となっているといえよう。正月に家族は一堂に会するのだが、誕生日だけでも、子どもの誕生日、兄弟の誕生日、親の誕生日と、一年に何度も家族が集まる機会をつくっている。彼らの家族は夫婦家族を中心としており、父母の祭祀にも、誕生日の祝いにもその個人化された性格は表れており、祖先を共有する親族には発展しない。しかし、老いた父母が生きている限り、息子や娘の家族はこのような活動を通して拡大家族としての絆が確認されている。彼らの誕生日の祝いには、移住した家族が頼ることが出来る絆を開拓し、常に更新しておかねばならない切迫した感情の一面を見ることも出来るのである。

親の誕生日を祝う行事が、定式化しているのが「花甲会」である。

花甲会は親の還暦を祝う会である。行事の進行を見てい

ると、結婚式を熟年になって再度行う金婚式をうかがわせる。都市ではホテルで行うことが多いが、夫婦は着飾り、自動車を連ねて会場に向かう。会場では上座にテーブルがセットされ、さまざまな種類の花と果物、海や野の食材などが所狭しと並べられる。夫婦が席に着くと、年長の息子が挨拶をして開会する。プロの司会者と歌手をつけて歌えや踊れやの大宴会となることも少なくないが、結婚式にはみられない花甲会に固有の性格がある。まず、結婚式では、家族のテーブルは前に設定されているが、宴会の主役は職場の上司や同僚、友人で、家族が前面に出ることはない。しかし、花甲会の儀式は、家族が前面に出ることで成り立つ。主人公となる還暦を迎えた夫婦に対して、息子の世代から始まる輩行、近親の順に、親族全員による叩頭と献杯が続く。叩頭の順は親族の近縁関係を表出させ、共通の祖先の祭祀にかわって、還暦を迎えた夫婦が基点となる親族関係の絆が互いに確認されるのである。

(2) 運動会

延辺朝鮮族自治州では、毎年秋に、村、鎮、そして自治州の単位で運動会が開催される。都会から離れた村では、老人会のゲートボールや朝鮮将棋などを中心にして、費用をかけない簡素な行事になっているところも少なくないようだ。鎮単位の運動会になると、サッカー、バス

ケットボール、バレーボールの競技は男女別の地区対抗試合となり、相撲やプランコなど伝統的な種目も盛んで、会場周囲は小屋がけの飲食店や駄菓子屋などが店を出し、祭日の雰囲気にも包まれる。運動会が秋の行楽行事として村人が交歓する場となつてゐる姿は、かつての日本の小学校の運動会が「村」の運動会の一面を持つていたのと似た性格があるのではないかと推測される。

しかし彼らの故郷ばかりか、移り住んだ大都會でも運動会が組織されている。ソウルでは一九九九年から「仲秋祭り」と銘打つて歌謡大会を中心とした行楽行事を行つており、二〇〇一年には韓国テレビ局KBSとの共催で「KBSのど自慢」を開催し三万人もの観客を動員した。大都市で見知らないもの同士を多数集める行事は、故郷の村には見られない性格が現れていると考へる。青島で二〇〇二年十月二〇日に開催された「青島市『21世紀杯』少数民族伝統体育項目運動会」を参考に、都市で開催される行事の性格を検討しよう。

青島市民族宗教局の認可のもとに開催され、本来は青島に在住する少数民族の活動を支援することに趣旨があるということであつた。だが、青島に住む少数民族の大多数は朝鮮族ということで、実際は朝鮮族の運動会となつてゐる。会場に掲げられるアドバルーンには、漢字では「民族伝統項目運動会」と書かれてゐるが、ハングル

では「朝鮮族伝統項目運動会」と記されてゐた。青島市政府から運動会開催のための補助金として一四万元が支出された。

運動会を組織したのは、朝鮮族企業者協会（公式名称は「青島少数民族経済発展協会」）のメンバーであつた。先の補助金のほか、企業家協会が自らの活動で集めた金額は一六万元ということであつた。会長のH・M氏は準備段階から中心的な位置にあつたが、運営の實際を担つたのは四〇歳代の人たちであつた。準備委員会には企業者協会の中心メンバーの人たち、これに地区代表と老人会会長などが参加して、三〇人程度の人が集まつた。

開催された当日は、北からの小雨交じりの風が強く、運動会の開会が危ぶまれたが、少し遅れて開催となつた。そのため、参加者は予定してゐたよりも少なかつたということであつたが、各地区の十二隊がそれぞれ統一されたユニホームで入場行進を始めた。年輩が多く参加してゐる地区では、伝統のチマチヨゴリを着る人もあり、色彩を添えてゐた。銅鑼や太鼓をたたいて調子を整え、「農楽」を踊りながら行進する地区もあつた。

開会式のプログラムは、以下のようであつた。

1. 入場行進
2. 国歌・国旗掲揚
3. 中韓経済発展協会 X 副会長による開会宣言

4. 12の礼砲

5. 来賓紹介

6. 青島市少数民族經濟促進委員會 H副會長開会の挨拶

7. 青島市民族宗教局民族事務局 M副局長 祝辞

8. 韓国外商投資企業協會 Y會長 祝辞

9. 運動員宣誓

10. 審判員宣誓

11. 運動員退場

12. 試合開始

開会式の挨拶は、中国における少数民族の位置づけを強調した内容であった。韓国外商投資企業協会長の挨拶では、参加者のスタンドから口笛や歓声が上がりが韓国企業にエールを送る場面もあった。

小雨の中で、老人会の演技が始まる。老人会は各地区で組織されており、地区別の対抗演技となっていた。秋千(ブランコ)、跳板(シーソー)、摔跤(相撲)、男子三〇〇メートル競争、女子一五〇メートル競走などがつづく。中国朝鮮族チームと韓国企業チームとの親善サッカーが始まり、点が入るたびに歓声上がる。昼食の間も試合はつづいた。すべての競技が終わったのは午後六時をすぎた。すでに暗くなり、勝者の表彰は夕暮れの中でおこなわれた。

秋千や跳板などは、中年の女性が意外と健闘した。秋

千は簡単なようだが、若い人は経験不足でぎこちなく力む割には高くあがらない。高くなると恐怖心も大きくなって、途中で降りてしまう人も多い。だが、中にはやってみようという積極的な人もいて、中年の女性に力の入れ方などを教わりながら練習をしていた。実際の競技は午後から始まったが、午前中はこのような人たちの恰好の練習の場となった。

跳板は二人の呼吸が合わないとき高く跳ぶことができない。相手の技術レベルが記録に直接反映してしまうようだった。公平にするために、中年の女性のうちで相当な技術を持った人が、順番に相方を務めていた。記録を伸ばすには、もっとも上昇した時に、ひもをくくった足をバレーのように高くあげて高さを競った。この技術はフイギアー・スケートの回転を連想させ相当高度のもののようにであった。延吉の体育学校には伝統種目の学科があるという。中年の女性の中には体育学校で学んだ人があり、若い人にアドバイスをしていた。秋千や跳板は一般のスポーツ競技の種目ではないので、このような運動会が技術を継承する機会となっているとみられた。

秋千と跳板の勝者にはカラーテレビ、相撲の勝者には冷蔵庫が副賞として贈られた。入賞者にはひろん、参加者にはいろんな品物が贈られた。キムチと鞆のセット、レインコート、セッケンの詰め合わせ、女性の下着セッ

トなどが次から次に配られる。これらの品物の一部は青島の朝鮮族企業から現物寄付として贈られたもの、またレインコートやキムチなど中には韓国企業の製品があった。

運動会のために集めた寄付金は全体で約三〇萬元になった。寄付は朝鮮族の経営する企業が担っており、企業が集中する城南区、北区、四方区などは四萬元から五萬元を集めたといわれている。反面、企業経営者のいない大学関係者が参加する文教隊は、四五〇〇元と最も少なかった。文教隊が集めた金は少ないので、組織委員会には報告のみでお金を上納していない。支出の主な項目は、競技に参加した人のユニホーム代、送迎用のバス二台の貸し切り費用、参加者の弁当代（小学生を含む約二〇〇名）、準備のための食事代、最後の打ち上げの費用であった。

運動会の運営全体の取り組みも、組織委員会の中心メンバー五、六人が仕切っていた。相撲の土俵は前日に準備したが、記録係が使う椅子と机は役員自らが運んで設置していた。運動会の委員として名を連ねているC・Y氏は、マイクを握って対戦の取り組みを仕切っていた。綱引きでは、観衆を整理するのに経済発展協会副会長として重鎮のX・G氏自身も出てきてマイクで離れるように注意をしていた。試合が始まると、我が隊を応援する

ために綱引きの周りに集まってくるし、熱が入ると観衆もその周りにどんどん迫ってくる。綱を引くものは力が入ってバランスを失い、観衆の中に転んでしまうことも度々起きる。こうした観衆を整理するのも、組織委員会の中心メンバーが担っていた。参加者は競技にノミネートされただけで、どのようにやるのか十分説明されていない。しかも、プログラムは配布されていないので、次の競技に備えて準備するのもアナウンサーがマイクで呼びかけていた。リレーのような簡単なものでも、どこでどのようにバトンを受け渡すのか、その場で説明するので時間がどんどん延びていった。

以上の運動会のスケッチから、運営についていくつかの特徴を見ることが出来る。

第一に、運動会は朝鮮族企業者協会によって企画された。プログラムの作成、寄付金の徴収、参加者の組織まで朝鮮族企業者協会が担っており、当日は組織委員の中心メンバーが競技の進行から競技内容の説明まで全て引き受けていたのが注目される。

第二に、競技の参加は区単位に組織されており、統一したユニホームを着て、競技の得点を争う形式になっていた。各地区には、競技の中核となる組織がある。朝鮮族がもっとも集住する李滄地区では、伝統芸能の担い手として活発な活動をしている老人会があり、「農業」を踊

って運動会に花を添えるなど衆目をあつめた。他の地区にも、例年リレーで活躍する人、秋千や跳板などで活躍する中年の女性があり、彼らは地区ではよく知られており、参加者の組織化は彼らが中心になっているといわれている。

第三に、寄付金の徴収も、地区単位となっている。地区の代表者は、多額の寄付金を集める力を持つ人に委任される。大学関係者が参加する文教隊は企業経営者がいないので、個人的な寄付のみでは地区の活動に必要な金額を集めることが出来ない。そこで、準備委員会は隊長に経済発展協会副会長のX・G氏の息子で青島空港に勤務するX・X氏を指名した。X・X氏は一〇〇〇元を、父のX・G氏は二〇〇〇元を寄付したが、この父子の寄付金は文教隊の集めた四五〇〇元の七割になる。X・X氏は文教隊とは何ら関係もないが、文教関係者には適任者がいないので準備委員会から指名されたと説明した。

第四に、運動会の運営の中心メンバーは、朝鮮族企業者協会の中の四〇歳代が担った。彼らの説明では、市政府が後援する大きな行事を成功させることに関心があつたという。運動会を運営すると、市政府や韓国企業の団体との関係はむしろ、各方面との協力関係を取り付けることが出来る。運動会の運営それ自体が、彼らにとって新しいネットワークを構築する機会となっていたのである。

る。

第五に、運動会に参加したのは二〇〇〇人になるが、青島に住む中国朝鮮族全体からすると、ごく一部にすぎない。青島公安局の統計(二〇〇二年現在)によれば朝鮮族の人口は一万四千人と登録されているが、未登録者は増えており現在は七、八万人に及ぶといわれている。未登録者は運動会など公に組織された活動にはほとんど参加していない。

(3) 青島における朝鮮族の組織

青島に朝鮮族の居住者が増大したのは一九九〇年代半ばからで、一九九二年に韓国と中国が国交を結び韓国企業が対中投資を拡大してからのことである。中小の企業が集中する李滄区と、工場団地と住宅区が開発されている城陽区には朝鮮族が集住する地域がある。韓国人も多く住み、街にはハングルが溢れ、青島の中の小韓国という様相を表している。このような背景のもとに、政府から公認された組織として朝鮮族企業家協会(正式の組織名は青島少数民族経済発展協会)と朝鮮族老人協会がある。この他に、朝鮮族婦人協会、朝鮮族ゴルフ協会、朝鮮族サッカー協会がある。

朝鮮族社会の活動の中核となるのが朝鮮族企業家協会であることはいうまでもない。青島市政府との連絡など、朝鮮族に関する行政事務の通達や処理は朝鮮族企業家協

会をとおして行われている。協会は一九九八年に創立され、約一五〇社の経営者が参加している。主な活動は、会員間の親睦と韓国企業家協会との交歓会の主催が主だが、春のハイキング、六月の環境保全運動、十月の運動会、年末の忘年会などもある。

朝鮮族老人会が最初に組織されたのは李滄区で、一九九六年のことである。その後、地区ごとに組織されている。老人会の主な活動は地区ごとで開かれる交歓会への参加であるが、李滄区の活動は活発で、民族伝統舞踊（農楽隊）が組織されており、国際労働の日（五月一日）、国際婦女の日（三月八日）、共産党創立日（七月一日）、あるいは韓国の諸団体との交歓会に招かれて農楽を踊ることもしている。

朝鮮族企業家協会は、春節（旧正月）に歌謡と舞踊を上演するなど敬老活動をしている。二〇〇二年二月は八万円もの寄付をする企業があり、他の企業からの寄付もあわせて十五万円集めることが出来た。延辺自治州の歌舞団一五〇人を招聘し、市長、副市長、韓国企業家協会の会長なども招いて、青島市内一〇〇〇人の老人が参加する大規模な敬老会を挙行した。

以上、青島で組織されている朝鮮族の団体の活動を概括した。中国では任意の組織や団体が活動するためには政府の許可が必要である。朝鮮族企業家協会も政府に申請

している正式名称は「青島少数民族経済発展協会」で、朝鮮族が単体で民族名称を冠した組織をつくることは認められていない。しかも、団体や組織が認可されるのは、企業、社区（コミュニティ）、学校に関連した半行政的組織、婦人や青年などに関連する半体制的組織、あるいは愛国的宗教団体（中国天主教愛国協会、中国基督教三自愛国運動委員会）や民主諸党派（中国国民党革命委員会、中国民主同盟など）のように管理された宗教団体と政治組織など、ごく限られた範囲でしかない。この中にあって、呼称が「朝鮮族企業家協会」であるように、朝鮮族の企業家が組織し、青島の朝鮮族社会の活動の中核として役割を果たす団体をもつのは、青島の朝鮮族が自立した社会的存在として活動するのに極めて例外的に恵まれた条件を有していると言つてよい。

三 青島朝鮮族社会のバックアップ

（一）黒竜江新聞青島支社

青島でハングル文字による新聞が発刊されている。その一つはハルビン市に本社をもつ黒竜江新聞社の「黒竜江新聞」と、その青島版（土曜日版）の「沿海消息」がある。青島支社が置かれたのは一九九七年で、支社が取り次ぐ「黒竜江新聞」は五〇〇〇部、「沿海消息」の発行は一九九八年である。「黒竜江新聞社青島報道センター」

を併設する。青島に住む韓国企業家、中国朝鮮族に読まれる新聞媒体として役割を果たすよう努力をしているという。青島市に韓国から外資を誘致し、国内の投資に貢献したことで、二〇〇〇年に青島市政府から優秀団体の表彰を受けている。黒竜江新聞社青島支社は朝鮮族企業家を取材することが多く、取材で得た知己のネットワークを通して朝鮮族企業家協会の組織を提唱し、その実現の準備を担ったのは前支社社長のN・R氏であった。

『沿海消息』の主な内容は、山東半島の沿岸にある企業の動向、投資情報を掲載している。青島の記事が中心だが、威海、烟台、濟南など、韓国をはじめ海外からの進出企業動向が広く取材されている。時には上海、広東（深圳）企業に関するニュースも特集として組まれている。また山東半島に於ける朝鮮族社会の現状や韓国の文化や社会に関するニュース、あるいは中国の政策法律の解説、生活、就職情報と健康生活案内、スポーツとレジャーなどと、土曜日版としての娯楽性も重視していると説明している。

黒竜江新聞社のほか、吉林新聞社、遼寧新聞社、延吉日報が相次いで支社を青島に出したが、後続の三社は数年間で撤退した。黒竜江新聞が開展できたのは、ニュースの対象範囲を山東半島に限らず、中国の沿海一帯の企業活動を視野に入れて全国的に取材したところにあった

のではないかと説明している。

青島で出版されているハンゲル文字による定期刊行物（二〇〇二年現在）は、次のようなものがある。

『ジェネラル』.. 北京に本社がありこの青島版、毎週一回の発行。

『青島紹介』.. 中国政府の批准のもとに、韓国の雑誌社が月刊で出版している。

『Life』.. 韓国の雑誌社が未批准で出版（月刊）。

『21世紀のビジネス』.. 韓国の雑誌社による、未批准で出版（月刊）。

『経済与文化』.. 中国朝鮮族の人が出版する未批准の雑誌（月刊）。

韓国人の出版する月刊誌は、韓国企業を対象にしており、一般に中国朝鮮族の企業家が購読することはないという。

(2) 朝鮮族学校

青島には一般学校以外に、インターナショナル学校、青島国際学校、青島日本人学校、青島ソウル国際学校、青島韓国国际学校、青島華僑学校、そして青島朝鮮族小学校がある。前二者は、英語を常用語とするアメリカンスタイルの学校である。日本人学校は二〇〇四年に日本政府と青島日本人会によって開校された。青島ソウル学校は李滄区に韓国人によって設立された韓国人の子弟に向

けた学校で、小学校から高校までそろっている。青島韓
国人学校は二〇〇四年に韓国政府の支援のもとに開校さ
れた。青島華僑学校は韓国人の多くに住む高級住宅地（青
島市香港東路）にあり、中国語を母国語としない子ども
たちのための学校で、生徒の半数は中国人、半数は韓
人である。青島朝鮮族小学校は、青島の朝鮮族の人が開
校した朝鮮族の子弟のための小学校である。以上のように、
青島における韓国人の増加に連れて、韓国人向きの
学校が増えてきている。

朝鮮族小学校の運営状況をK・N校長は以下のように
説明した。

朝鮮族小学校は、李滄区に閉鎖した工場を借りて二〇
〇〇年九月に開校した。現在の生徒数は一二〇名、教師
と事務員は二十一名である。開校当初の資金は全てK・
N校長の個人的な資金でまかなった。K・N校長は黒竜
江省の出身で、当地で小学校の教師をしていた。北京の
朝鮮族学校で四年間教師をした後、青島で朝鮮語学校が
開校できるのではないかと考えて、移住してきたという。

開校して三年目（二〇〇三年）になったので、青島の
朝鮮族企業家と面識ができ、黒板、机、椅子、消耗品な
どの寄付を企業に要請することができるようになったと
いう。経営としてみると、生徒が二五〇人で収支が合う。
現在のところ生徒の募集が伸び悩んでおり、毎年赤字が

一万元くらい出る。この不足を、企業からの寄付や教材
や食料などの現物支給などでやりくりしている。

教師は、黒竜江省出身者が多い。黒竜江省の師範学校
を出た若い人を採用している。教科は、普通の小学校と
同じものを使う。朝鮮語を主体としているが、漢語と英
語は一年生から必修科目としている。

生徒は全寮制で、教育の面と養育の面を兼ね合わせて
いると説明している。中国の東北三省からの移住者がほ
とんどだが、彼らの両親は出稼ぎなどで青島に来ており、
工事現場で居住したり、外に行商に出たり、あるいは居
住条件が悪く、親元で子どもを育てる条件が欠けている
場合が多い。子どもは、週末に親元に帰り、月曜日に登
校する。

一年の学費は六千元で、教科書代、宿舍費、食事代な
どすべてを含んでいる。青島中華学校の学費は寮費を含
むと年間三万六千元、アメリカンスクールの学費が一万
二千元から一万元するのと比較すると、朝鮮族学校の学
費はずいぶん安く設定されているようにみえる。しかし
一般の小学校の学費が年間一千元なので、年間六千元の
学費に対する両親の負担は軽くない。学費の負担が大
きいこともあって、当初予想したようには生徒が集まっ
ていない。K・N校長の説明では、二〇〇四年に申請し
ていた中学校の設立が却下され、この二年間が経営が継

続することが出来るかどうかの瀬戸際にあるということであった。

二〇〇三年に青島政府から三〇年契約で土地と新校舎と宿舎を借り受け、九月から校舎を移した。また、韓国ソウルの小学校と姉妹校交流を結び、交流を始めている。二〇〇四年の夏は、姉妹校から三四人の生徒を受け入れ、旅行を主体にした交流を実施した。しかし、K・N校長の意見では、青島在住の韓国人の子弟の入学はあまり期待していない。韓国から派遣された駐在員は短期の人が多く、子どもの定着がよくないと言ふことであつたが、他面では、韓国の子どもは「礼儀も知らないし、勉強もしない」という教師の意見があり、朝鮮族の子どもでは生活習慣が異なつて同一の規則でもって指導するのが困難だという理由もあつた。

朝鮮族学校はこれまで何人かの人が設立を図り、青島の朝鮮族にとって文化センターとして機能するよう期待されたところもあるが、現在のところ経営は必ずしも順調でない。

(3) 活動をバックアップする企業家

朝鮮族の活動には、寄付をした企業の名を冠に付けていることがよく見られる。一九九八年四月に行われた青島における朝鮮族の第一回目の運動会は、正式の名称を「青島市少数民族第一回『亜赫杯』運動会」と呼ぶ。これ

は、朝鮮族の代表的な企業である亜赫大信防火板有限公司が多額の寄付金を提供し、運営に必要な総額二〇万円の寄付金を集める原資となつたからである。企業名を冠せないまでも、朝鮮族の活動には企業の寄付が期待されている。二〇〇四年の運動会では鮮族企業者協会が十六万円集めたが、このうち協会長でもある玩具工場経営者のH・M氏は五万円寄付している。またH・M氏は二〇〇二年二月の敬老の催しでは八万円寄付し、企業家協会全体の寄付金十五万円の過半を負担している。青島における朝鮮族の活動は運動会や敬老の活動をはじめさまざまなものを見ることが出来るが、これらの活動は成功した企業家からの寄付があつてはじめて成り立っている事実もうかがうことが出来る。

寄付で朝鮮族の活動を支えている記事が『沿海消息』(二〇〇三年九月二八日〜十月十一日)に掲載されているので、以下紹介する。見出しは「城陽区朝鮮族運動会に一万元を寄付した世進自動車整備会社 金元河社長の物語」である。

金元河氏が青島で企業を経営するまでの経緯を次のように記している。彼の故郷は吉林省で、長年中学校の教員を勤めた。一九九〇年に長春に韓国企業が進出したのを見て、この企業に転職した。さらに、この企業での経験をかわれて、吉林省対外発展総公社の貿易部經理の仕

事も勤めた。

郷里での経験から大都市では朝鮮族の子弟に対する教育の需要が高いと考え、一九九八年に青島での朝鮮族学校設立の可能性を打診した。青島に来住していろいろな方面と相談したが、朝鮮族学校を実現するまでに至らなかった。しかし、この準備の中である韓国企業から企画能力や実行力が認められ、その企業の総経理を三年間勤めることになった。

その後、企業を起こすには技術が必要だと思い、息子を研修のために韓国に送り、自動車整備技術を学ばせた。二〇〇二年末に息子が帰国すると、二〇〇三年三月、青島空港に近いところに世進自動車整備有限公司を設立した。最新の設備を整え、韓国製の全ての車種について整備点検、韓国製部品による修理が出来る体制をとっている。また代車の無償貸与などのサービスもあり、城陽区内に進出している韓国企業から好評を博している。息子の整備技術と最新設備、そして韓国人脈のおかげで、会社の販売実績は月一〇万円を越えるまでに成長した。

城陽区で生活している朝鮮族多くは青島を第二の故郷と思って住んでいる。互いに知り合って助け合うのが大事だと考え、城陽区少数民族親睦会の副会長となり、城陽区の運動会に一万元を寄付したとインタビューに答えている。

『沿海消息』(二〇〇三年九月二八日〜十月十一日)には、韓国企業が朝鮮族の福祉活動に寄付を提供している記事も掲載されている。

T玩具は韓国の一〇〇パーセント出資の企業で、一四〇〇人の従業員がいる。韓国からの派遣社員は八人、朝鮮族は二〇人で主に管理職に就いている。管理部長も朝鮮族である。韓国人のK・C社長によると、地域社会への貢献が企業運営の信条だと説明している。T玩具がこれまでにした寄付、奨学金は次のようになると記されている。

恵まれない少年(シフジン地域の毎年五〇人)に奨学金支給、現在まで一五万元。

貧困家庭(シフジン地域、毎年五〇戸)に生活補償金支給。現在まで約十二万元。

シフジン養老院に毎年、家電製品(テレビ、エアコン、洗濯機など)を提供。

朝鮮族社会の文芸公演、体育大会などに賛助金支給、現在まで約三〇万元。

四 まとめ

以上に紹介した青島に住む朝鮮族の生活とネットワークから得られる知見をまとめると、次のようになる。

(1) 青島に住む朝鮮族の多層性

青島に住む中国朝鮮族は登録者一四〇〇〇人(二〇〇二

年現在)、未登録者も入れると七〇八万人になるが、この中の構成は一樣ではない。先ず第一に、急激に増大する以前から青島に來住しており、軍隊や政府機関でのキャリアを活かして企業家としての転身など新たな地歩を築いた人がある。第二に、一九九〇年代後半に來住し、韓国企業の間管理層として従事している人、自らが貿易や製造の企業を起こした人、あるいはレストランなどのサービス産業を起こした人たちがいる。第三に、企業の現業従事者、レストランのウエイトレスなどサービス産業に従事する人、小さな商売を始めた人たちである。登録者は第一と第二の部類に入る人たちで、未登録者は第三の部類の人たちである。このようにしてみると、青島における朝鮮族の急激な増大は、就業形態としては流動的な性格を持つ階層によって構成されていることが分かる。

(2) 「朝鮮族」はステータス

韓国の企業が中国に進出したとき、朝鮮族は中国の實情に通じており、通訳と仲介者として対応したのは彼らであった。その実績が認められれば、支配人や派遣社員に代わって現場を切り盛りする「代理」として働くことも難しくない。朝鮮族であることが、一つの社会的なステータスとなっているのである。

また、彼らが開店する焼肉店やレストランは、韓国料理店としてのエスニックなブランドとして客を引きつける。

このように、韓国企業が進出するカウンターパートとして働く場合はむろん、都市の雑業に就く場合も、「朝鮮族」であることに中国の他の少数民族にはない有用なスキルが備わるのである。北京、上海、深圳には、韓国企業が進出し、下請け企業も起こり、そしてサービス産業や雑業が集まるが、そこには韓国人と中国朝鮮族がつくるハングル文字が溢れ、朝鮮料理の食材がそろう市場があり、そして運動会など彼らの活動が組織された「まち」が出現する。その規模と自足性において、日本企業の進出によって形成される日本人コミュニティと様相も性格も異なるところである。彼らが自足的に生活できる「朝鮮族」社会には、中国朝鮮族の新たな移動を促すエネルギーが蓄積されるプールが形成されているのではなからうか。

(3) 企業家のバックアップ

中国の少数民族にあって、青島朝鮮族企業家協会のように移住した先に民族的団体を組織して活発な活動を展開しているのは朝鮮族の他にないのではなからうか。とりわけ民間の団体の設立は政府の認可が必要であり、自主的な団体は厳しく管理されている。この条件の中で、朝鮮族の企業家は、正式名称の「青島少数民族経済発展協会」という冠を置き、「少数民族」の立場を転用することで自らの地歩を得ている。青島朝鮮族の運動会、社会

事業の実施が示すように、企業家協会の組織が中軸として活動をバックアップしてはじめて朝鮮族の活動は成り立っているのである。

また、企業家協会の活動には、朝鮮族の情報ネットワークの中核となっている黒竜江新聞社の前支社社長のN・R氏、青島朝鮮族の重鎮として信望を集める中国経済発展協会副会長のX・G氏、そして企業家として成功を収めたH・M氏などのリーダーシップは不可欠なものである。

(4) ネットワークの状況主義的論理

移動の中に生きる朝鮮族の親族ネットワークは、遠い祖先を祭祀する集団ではなく、今生きている家族を中心に構成していることに特徴がある。その原理は、韓国に構成されていることに特徴がある。その原理は、韓国の宗族モデルで強調される父系単系出自原理ではなく、また都市で同姓・親族が組織する花樹会・宗親会の組織とも異なる。親族の絆は花甲会への催しに典型的に表現されるように、個人化された家族からなる「親戚」の両系的つきあいネットワークとなっている。リジットな構造を持たないことに特徴があるが、都市への不安定な移動をする場合、就業の世話や子どもの養育などを親や兄弟に依頼することも多く、むしろリジットな構造を持たないネットワークこそが状況に適合的に機能している。父系単系出自原理が、政治的な勢力として全国的なネットワ

ークに親族を結合するのに適合的であるのに対して、リジットな構造を持たないネットワークは、家族の個人的な問題を状況にふさわしく処理するのに適合的なのではないであろうか。状況的な論理で構成される家族のネットワークを担保にすることで、都市への不安定な移動を可能にしているとも言えるであろう。

参考文献

伊藤亜人一九八七「韓国の親族組織における“集団”と

”非集団“」伊藤亜人ほか編『現代の社会人類学 I』東京大学出版会、一三六—一八六頁。

岡田浩樹二〇〇一『両班』風響社。

佐々木衛・方鎮珠編二〇〇一『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店。

佐々木衛二〇〇五『中国朝鮮族に見られる移動と階層分化、エスニシティ』アジア社会研究会編『階層・移動と社会・文化』文化書房博文社、三九—五六頁。

註

本論文は、科学研究費補助金による『阪神華僑の国際ネットワークに関する研究』（研究代表者・王柯、平成十四—十六年度、課題番号・一四二五一〇一三）の研究成果の一部である。研究報告書『阪神華僑の国際ネットワ

ークに関する研究』（平成十七年三月）に所収されている。
編者の許可を得て、本誌に掲載した。

また、平成十五・十六年度の現地調査では、『国境を越える移動・エスニシティ・地域社会の再構築に関する比較社会学的研究』（研究代表者：佐々木衛、平成十五―十八年度、課題番号：一二五七一〇一七）の支援を受けた。